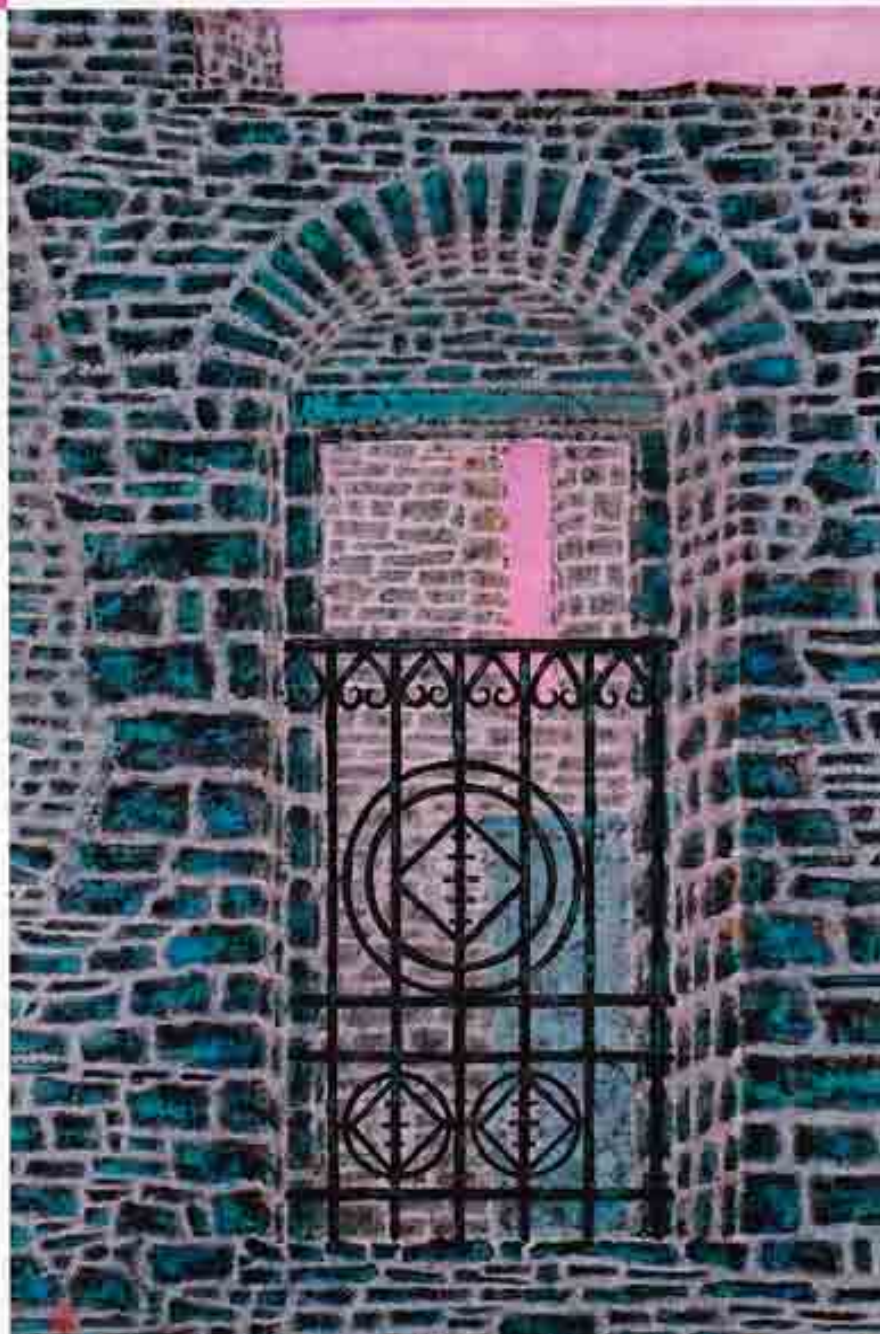


诗

4  
2020

创刊号(2020)



# 闇の微熱

能村 研三

## 自肅の句会

新型のコロナウイルスの影響で日本全体が騒然としている。この騒ぎの中、幸いと言ってよいのかわらないが、糖尿病の教育入院とやらで二週間余り入院生活を余儀なくされた。俳人協会はちょうど三月の総会の時期で、その開催の有無を事務局と連絡をしようとしたり、沖の句会についても三月中の全ての例会の中止をお願いした。

通常であれば朝の通勤時間帯に東京まで通勤しなければならぬのだが、感染の心配もあるところだが、その一番のピーク時に入院が重なったことも納果的にはよかったと思う。

一週間では大きなイベント、特に人が多く集まる集会については自肅の方向で動いている。この時期であるから入学試験や就職活動、卒業式などもある。しかし人と人との接触を

探梅のしんがりにもる識者かな  
老幹の黒尽くしをり寒の果  
飽き足らぬ寒さのままに開けにけり  
没原稿裁断確と春寒し

夜々芽吹く闇の微熱のただよへり  
逸る眼をもて北窓を開きけり

闌け盛る古色帯びたる梅一樹

磧石雨なきままに二月逝く

磯巾着餌取りの靡き美しき

春潮の波裏描く伊八かな

余儀なくされるものだからこは自肅の方針に従わざるを得ない。

俳句会は昔から「座」の文学とも言われているように、人の和をもって始まり、和をもって終わるとされる。お互いに膝を交えることで、お互いの詩情を誘発して句が生まれるのである。

近年はインターネットによるネット句会なるものもあるが、これであれば人と人が接触せずに、座の効果は一部では果たせるかもしれないが、それも何となく味気ない。

「沖」は秋に創立五十周年を控えており、早くこの騒ぎが終息してもらうことを心から願うばかりである。

やはり俳句会には人と人が接触して座を作ることが肝心である。

能村 研三

# 山辺の道

森岡 正作

## 野火追ひて

古代の人々が火を起こす術を身に付けて、それが物を焼いたり煮たりする他に、暖を取ったり、明かりともなることを知った。私たちも物心がついて、燐寸の小さな炎に魅せられ、落ち葉焚きに興じ、焚火に胸や顔を赤らめた。そして、大人が付ける野火の炎に興奮し、野山を駆け回っては冒険心を高ふらせ、仲間と野火の炎の高さを競い合った。

登四郎先生の御句の中に、〈野火追ひて走りし夢をいまでも見る〉の句を見た時は、あの登四郎先生にも腕白の時があつたのだと妙に愉快な気持ちであつたが、後に詠まれた〈野焼人すぐに炎中にかくれけり〉の御句にはこの上なく納得させられた。

時は春、新たな気持ちで野火の一句を詠みたいと思う。

大寒の竹小気味良き割かれやう  
羅漢にも臘梅一枝持たせけり  
水温む母艦のごとく鯉の浮き  
林道の裾削りゆく雪解川  
山辺の道落椿落椿  
桃の日や八戸の村に八個の灯  
海女の笛悲しきときは哀しき音



能村 研三

びしと音跳ねて太梁雪来るか 宮岡 弘

飛騨白川郷の合掌集落にある古民家を思い出した。大家族が住み、養蚕などの仕事を一つの家で賄うにはよほどしっかりした家でなければならぬ。まして豪雪地帯であるから雪の重さに耐えられるよう、太い柱と梁を建材に使ってきた。高い天井にたくさん梁が交差する姿は見事である。これから雪の季節を迎えるが、その前にその役目に十分応えるべく「びし」と音をたてた。

贖罪の音させて踏む薄氷 小倉 征子

「薄氷を踏む」と言う言葉がある。水面に薄く張った氷の上に乗るような非常に危険な場面に望む心境を言ったものだが、折角張った薄氷を踏む時にはいささかの罪の意識を覚える。これを作者は「贖罪の音」として捉えた。

寒林の眠りのなかに見る萌し 矢野美沙子

「萌し」と書いて「ぎざし」と読む。木々が全ての葉を落として静まり返った寒林は休むことなく寒さの中にも春の胎動が感じられ、芽を吹くための準備に入る。眠っているように見えても春に向けた萌しは確かである。

光年は天文学で用いられる距離の単位だが、光が一年かかって届くのが一光年というから簡単に想像がつかない世界である。冬は大気が澄み凍空の星の光は鋭くその瞬きはさざめきのようにも思える。しかし今見えるこの星は今の冷たい夜空から放たれたものではない。何億年前という果てしない時に放たれた光が自分のいる地球に届いているのである。こう考えると地球がいかに小さく私たち人間も儂いものかがわかる。

凍星のさざめき光年てふ単位 佐藤 克江

冬銀河テレビを置かぬ島の宿 熊谷 成子  
ここで詠まれた島は頻繁に定期船が行き来するような島ではなく離島のようなところにある小さな宿なのであろう。もちろん空気が澄んでいて、冬の凍てついた空にかかる冬銀河も身に沁みるような味わいがある。島の宿主が部屋にテレビを置かない理由は定かではないが、宿に泊まった作者はそんなことに拘ることなく海に広がる冬銀河の美しさを存分に堪能するのだ。

# 能村登四郎の軌跡〔20〕

能村 研三

霜掃きし箒しばらくして倒る

『長嘯』平元

登四郎自らの庵を「鳩亭」と名付けた。書齋での仕事に疲れると気のむくまま庭の手入れをすることがあった。竹箒は門の脇にいつも立てかけられていた。身の引き締まるような寒さと静寂の中、ことりと微かな音が耳に届く。少し前に庭を掃き霜のついた箒が倒れたのだろう。日差しが出てきて箒についた霜が解けてゆるんだのだ。何でもない日常の中の出来事だが季節感の時間差表現が何とも巧妙である。年齢を重ねないと見えてこないもの、つまり芭蕉のいう「ものの見えたる光」であろうか。天啓とでもいふべき瞬間である。

まさかと思ふ老人の泳ぎ出す

『長嘯』平元

登四郎自らの庵を「鳩亭」と名付けた。書齋での仕事に疲れると気のむくまま庭の手入れをすることがあった。竹箒は門の脇にいつも立てかけられていた。身の引き締まるような寒さと静寂の中、ことりと微かな音が耳に届く。少し前に庭を掃き霜のついた箒が倒れたのだろう。日差しが出てきて箒についた霜が解けてゆるんだのだ。何でもない日常の中の出来事だが季節感の時間差表現が何とも巧妙である。年齢を重ねないと見えてこないもの、つまり芭蕉のいう「ものの見えたる光」であろうか。天啓とでもいふべき瞬間である。

鉄砲町秋水の縦一文字

『長嘯』平元

「沖」長崎支部が僚誌「沖長崎」を発刊、その記念会が長崎で行われ、東京から登四郎に加えて坂巻純子、北川英子、私などが同行した。中尾杏子の案内で島原を訪ねた。島原城の近くには武家屋敷があり、水神祠横には水原秋櫻子の「走り梅雨水声町を貫ける」の句碑もあった。武家屋敷が連なる下の丁には、杉山権現熊野神社からの湧水が流れていて石垣に水音を響かせていた。この句は、立ち寄った南風楼の女将に墨と硯を持って揮毫を求められ、しばし熟考したのち、色紙に向かって筆を滑らせた句。まさに即吟の一句である。

鳥食に似てひとりなる夜食かな

『長嘯』平元

登四郎は七十九歳、春の叙勲を受けた年である。このころは病氣らしい病氣もすることなく、仕事にも精神的であった。母が亡くなってから、同じ屋根の下に私たちが家族と同居するようになった登四郎は、時折は家族一緒に団欒を囲むことがあったが、夜も出入りの激しい子供たちのペースに合わないので、食事を自らの部屋に運んでとることが多かった。話し相手がいない場所と一人の食事はやはりわびしい思いもあったことだろう。それを品性崩さず客観視して情感深く詠んだ句である。



# 蒼茫集



花の種

菅谷たけし

冬ざくら

梅村すみを

取り敢へず蒔く名の知れぬ花の種  
葉牡丹や父を送りて五十年  
日本列島漂着したる冬の雲  
初咲きもひとつは淋し寒椿  
臘梅の溶けたる蠟の零れ継ぐ  
\* 風の出で明るき梢日脚伸ぶ

\* いのちとはかくもしづかや冬ざくら  
戦死せし子の写真古り年守る  
立て句のごと松の聳ゆる淑気かな  
ややこしき世をのほほんとい脚伸ぶ  
それぞれにそれぞれの影冬木立  
窯に火を入るる日梅の咲き初めし

春

氷

宮内とし子

男の樹

河口仁志

\* 春氷つつけば沈む利休の忌  
寒波来る枯山水の渦深し  
梅咲いて時空ひろぐる武家屋敷  
沖合の潮の目春の近づけり  
山笑ふ千年木を抱きをれば  
早春や俄かに跳ぬる牧の馬

\* 冬木立櫛はどれも男の樹  
スカイツリー全容染めて寒夕焼  
麻痺の手を濯ぐ温みや冬泉  
父の忌を修し故郷の山笑ふ  
流水に磁気あるごとく閑ぎ合ふ  
地球史にチバニアンとや蝶生る

寒 牡丹

吉田政江

菰傘へ細き日の筋寒牡丹  
ポタージュに変へる献立雪催  
\* 寒九晴びびつとノブの静電気  
本命や東風かき分けて女性騎手  
初午やいつもの場所の陶器売り  
氷に上る魚後悔のついて来し

声とどく

田所節子

凧あがる天に引力あるごとく  
壺焼を傾かせたる火勢かな  
\* 水琴窟地底の春の声とどく  
蕪蒸しいつか阿吽の仲となり  
春めけりあまたの付箋貼る句集  
蒸し牡蠣に翅のやうなる紺の襷

がうがうと風

辻美奈子

漣の重なりあうて春の川  
\* がうがうと風や柳の鞭しなふ

挿しておけば根の出るしくみあたたかし  
燕来るおほかたのことなべて些事  
立ちてすぐ忘れ蛙の目借時  
太陽の国の文旦届きけり  
道連れに  
千田百里

建国日なべて男の優しくて  
豆撒くや鬼と鬼嫁のみの家  
あそびせんとや糸電話より春動く  
\* うらけし道を問はれて道連れに  
鷹鳩と化しダークスーツの群に入る  
亀鳴くやさてこれよりの青写真  
目つむりて  
荒井千佐代

法螺の音が弥撒を知らせる島の春  
受験子の背中叩けば厚かりし  
\* 目つむりてゐても眩しき春の灘  
山焼きの熱の残れる殉教碑  
綿菓子にくつついて来る春の風  
鶴帰る原爆炸裂せし空を

# 潮鳴集



国 道

菊川俊朗

家系図の端を略して冬館  
寒垢離を終へし足指地を掴む  
\* 東京は流れ着く街インバネス  
恋猫の今日は国道越えてゆく  
春の潮鰐を数へて跳ぶうさぎ

貴腐ワイン

小林和世

\* 漣は湖の語り部涅槃西風  
立春の淡き白もて「貴腐ワイン」  
宮司・巫女煤梵天や雪催  
逃げ水に自動制御の愛車かな  
遠嶺や鷹匠の鷹瞬かず

アンケート

諸岡和子

冴え冴えと恐竜館の歯の化石  
春近し前屈の指地に触れて  
トローチの丸き穴より覗き春  
\* 如月の封のままなるアンケート  
ものの芽やうれしきことは口に出て

鍬の音

荒井千瑳子

\* 梅早し鍬の音するなぞへ畑  
日脚伸ぶ介護施設の開かぬ窓  
早春の翳みな淡し利根川原  
ため息のひとつ深きや年の豆  
春立つや自給自足の無き暮し

## 沖作品



## 能村研三選

ちよろづの神のまほろば初明り

市川市

佐藤 克江

\* 凍星のさざめき光年てふ単位

凍蝶に今しも雲間より光

もの言ひて止まる寒夜の洗濯機

\* 冬銀河テレビを置かぬ島の宿

千葉

熊谷 成子

聖廟へ連なる葺初松籟

葺き替へし庫裡・方丈や日脚伸ぶ

大暖簾かけし見世蔵去年今年

鳥の目の見え隠れする枇杷の花

白鳥来限界集落鎮もりぬ

雪女消えし館や夢二の絵

\* 築地のみ残す生家や藪柑子

びしと音跳ねて太梁雪来るか

石塊は流人の墓とや石路は黄に

神奈川

宮岡 弘

梟の闇の厚さよ山国よ

福岡

小倉 征子

空耳に振りむく日向ぼこりかな

ノツカーの響きの重さ梅匂ふ

三更や思案の淵の冴返る

\* 贖罪の音させて踏む薄氷

言の葉の海に漂ひ去年今年

市川市

矢野美沙子

\* 寒林の眠りのなかに見る萌し

抱きしめてみたき青さや初御空

迷ふのもまた一興と探梅行

初春のひざし深々青豊

お降の水琴を聞く社かな

\* 白鳥来一課増やせる村役場

一拍のおくれが愛し初舞台

昨日の野球の声す霜豊

畑に霜丹色の月の昇りくる

千葉

川崎登美子